

岡村金蔵の著した栽培法について

松下 卓生 神奈川県横浜市

岡村金蔵は、前掲の著述の中で、栽培法を1. 実生法、2. 株分法（土用株分法・秋株分法・冬期株分法）、3. 芽分法の3つに分類している。これを同時代に刊行された池田喜兵衛の『花菖蒲の作り方』と石井勇義の『牡丹花菖蒲の作り方』と比較対照してみると、東京、熊本、松阪での栽培方法の違いがある程度分かる。著述内容からゆくと岡村の知識は他者を包含した幅の広いものであった。例えば複数芽に分け植栽する「土用株分法」は東京での大鉢作りに通じるし、一芽植えとする「芽分法」は熊本式鉢植え法である。さらに驚かされるのは「冬期株分法」である。これは1976年に富野耕治が保育社から出した『花菖蒲-アヤメ類-』の中で「寒芽分け」として紹介されている。『実際園芸』に出筆した岡村の記述は、後に続く富野耕治、平尾秀一に与えた影響が大きかったのではないだろうか。

以下は拙文ながら、岡村金蔵の著した栽培法の要点を私なりにまとめてみた。皆様のお役に立てれば幸いである。

実生法

一度に大量の個体を得るには実生による繁殖が最も効率的であるが親と異なる個体が発生し易いので品種保存には向かない。品種改良の様に親より優秀な個体を作出する場合には最適である。

実生の方法としては播種時期を採種直後にするか翌春にするかの2通りある。

（採り蒔き法・秋蒔法）は9月に完熟した種子を採種後すぐに蒔く方法で、発芽後間もない幼苗で越冬しなければならないので冬季の防寒対策が必要となるが、翌春蒔きより一年早く開花するので品種改良を継続的に行うには効率的な方法になる。

（春蒔法）は採種後保存しておいた種子を翌春に播種する方法で、一斉に発芽し、発芽後の管理も簡単で初めて実生を行うには非常に良い方法である。

株分法

品種を保存しながら個体数を増やすには株分法が最適である。花菖蒲は枝が無い為挿し木や接ぎ木が出来ない。そこで栄養繁殖を行うには株分が確実である。時期別に三通りの方法がある。

（土用株分法）は開花直後に2~3芽ずつ株分けして植付ける方法で翌年の開花までの期間が長く、株が充実できる。開花後でなければ作業できないため遅咲き種だと近年の高温気候では猛暑の中作業するようになり活着に障害がでる恐れがある。そこで早咲き種等開花時期の比較的早い品種に限定して行うと確実である。

（秋株分法）は秋の涼くなった頃株分けする方法で、9月中旬頃2~3芽ずつ株分けして植付ける。7~8月の高温期は暑さで株が弱っており、この時期に株分けという大手術をされると回復に相当な体力が必要になり枯死するか、翌春開花できるだけの株の充実が見込めない。そこでこの時期は株分けを避け気温が涼しい夏後に株分けをすれば気候が良いため活着し易く株分け後の管理もし易い。この時、冬の休眠期まで生育期間が短いので葉や根を切り詰めないで株分けするのが良い。

（冬期株分法）は株分けする厳寒期を除く冬の休眠期に株分けする事で翌春の生育に影響が少ない様にする方法である。この時期は葉が無いので作業がし易い。根も休眠しているため扱いが非常に楽である。ただし、凍結に気を付ける必要がある。

以上のうち、どの方法が最適であるという事ではなく、個々の栽培環境や条件によって適切な方法を選ぶ事こそが重要である。例えば、北日本や高地など夏季比較的涼しい場所では土用株分法が適しているが、都市部や暖地では秋株分法や冬期株分法を行った方が良いという事である。

ただし、翌春開花させる目的での株分けという点でみると会報38号21頁にて私が御紹介した様に、開花には9~11月頃の短日期に十分な涼温を与え、尚且つそれまでに芽を充実させておく必要がある。その為には開花直後に株分けした方が良いので土用株分法を行い、夏期の高温対策を講じるというのが

適していると考えられる。

具体的な高温対策としては、例えばコンクリートは昼間蓄熱して夜間に放熱する為、栽培棚をコンクリート面からなるべく離して設置するとか、灌水時に苗だけに水をかけるのではなく周辺にも散水し、気化熱を利用した冷却を行うという様なことである。

芽分法

今までの2~3芽ずつ株分けする方法であるが、この他に開花直後から翌春までに1芽ずつ離して植付けけるという方法があり、これは熊本式鉢植え方法にみられる様に古くから行われている方法で、他の植物には無い花菖蒲に特徴的な栽培方法である。

この方法だと生理的に必ず花芽が付く状態になる。ただし、翌春開花するには別に株の充実が必要になる。

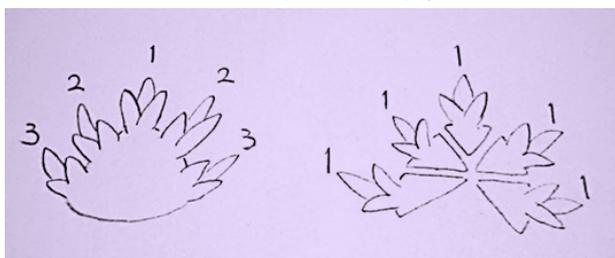
開花直後から翌春までの期間いつでも作業は可能ではあるが、芽の力が弱いため、活着まで細かい温度・湿度管理が必要になってくる。肥培条件による翌年必ず開花するため効率性が高い。

花菖蒲の開花生理として花芽形成には優先順位が発生すると考える。中央の芽が優先順位1位になり、その両脇は2位で、その外側は3位というように順番がつけられており、毎年順位が一つずつ上がり、順位が1位にならないと翌春開花しない。これは頂芽優勢という性質からくるものであり、成長ホルモンが関与していると思われる。

ところが1芽ずつ離して植付けると、全ての芽が中央の芽とみなされ優先順位1位になり、翌春開花する準備が整う。

この場合も、芽が充実してから短日・涼温条件に当たる事が必要なので秋になる前に芽分けを終わらせておけば翌春開花する。芽が小さいので株分けよりも夏越しの管理に気を付ける事が必要である。

花芽形成の優先順位



その他の繁殖法

付則として、その他の繁殖法を挙げてみる。

親木吹芽法

既に開花した親木、いわゆる「古いも」と呼ばれる根茎を砂などに埋めておき、新芽を発生させる方法で、芽数の少ない品種で1芽でも増やしたい時に有効な方法である。

高芽による繁殖

花茎の節からの発根・発芽する時がある。これにより増殖する事が出来る。発生のメカニズムについては不明で、今後の課題である。

高芽発生の状況

品種名「長井黒雲」(清水氏提供)



考察

著書発表当時(1932年)と現代との栽培環境の違いを比較してみると以下の様にまとめられる。

- ・都市化が進んだことにより各家庭の栽培面積が減少し、それに伴い栽培数も減少した結果、少数多品種栽培が多くなった。

- ・集合住宅等庭の無い世帯が増加し、鉢栽培が主流となった。

- ・夏期の気候が高温化した結果、夏越しが困難になった。

これらから、現代の花菖蒲栽培においては、①高温に対する防止策 ②乾燥に対する防止策 を講じる事が必要不可欠ではないかと考える。